

# Harmony



Tel 045-342-0255 Fax 045-342-0288  
<http://www.yokohama-childline.com/>

2024年  
春号  
No.1

## よこはまチャイルドライン新代表理事 & 新副代表理事インタビュー

代表理事

### 松原 康雄

Yasuo Matsubara



#### Profile

1951年東京都生まれ。明治学院大学社会学部社会福祉学科教授を経て、2016年から2020年まで同学学長を務める。2023年より、よこはまチャイルドライン代表理事。著書に『少子化時代の児童福祉』『養護原理』ほか

### シンナーと一緒に吸えるのか、 その答えを問い続けて

大学を卒業後に大学院でもう少し福祉の勉強をしたいと思って、博士課程を希望したんですね。その際に指導教授に「松原君、福祉というのは机の上の勉強だけじゃ何もわからないよ、現場に出ておいで」というふうに助言をいただきまして、横浜市の児童相談所に通い始めました。

大学生の頃は、子ども会活動のサークルに所属していました。当時はシンナーを吸う青年や年長児童も少なくなかった地域でしたが、顔見知りになると「お前も一緒に吸うんだったら、話を聞いてやる」と言われましてね。当時は「体に悪いからやめよう」の一点でしか説得できなくて、もどかしい思いをしました。ずいぶんと説得はしたけれど、当然それではなかなか止めてくれない。大学で学んでいることは机上の空論だと分かってはいたのですが、やはり現場の難しさを感じました。そんな頃に、その児童相談所に配属された松橋秀之さん（現・よこはまチャイルドライン副代表理事）との出会いもありまして、

お互いに福祉の現場に関わる難しさや厳しさ、充実感を感じながら、ご縁もあり、それ以降も実践現場や行政にかかわらせていただきました。

大学教員としての籍を置くようになっても十数年間通いましたが、週に1回程度ですから、生半可なまとめ方はできないな、というふうに考えていて、ずっと論文を書かなかったんですね。「現場に行っちょろっと見て、わかったようなふりをして論文を書くなんておかしいんじゃないのか」って自分の中でも思っていました。そうして十数年を経てやっと論文を書けたのですが、これ以降もこの考え方は変わっていません。

### 一緒に考える、が原点

「支援が必要なのに支援を受けたくない状況」についてがその経験以降中心の一つとなっている研究テーマなのですが、困っているのに支援を受けたくない、というのはすごく矛盾しているように思えるのですが、実は多いんです。我々もそうじゃないですか、一番落ち込んだときって人のアドバイスなんか全然聞きませんよね。子どもがよく言う「わかんない」という言葉がありますが、あれは「関わって欲しくない」というサインだと思っています。ある意味心を閉ざしている状態、他者と関わりたくない、手を差し伸べてもらいたくない、という状況です。大人の場合は、公的な支援を受けることへの躊躇だったり、支援を受けることで社会的に何かラベルを貼られてしまうんじゃないか、という不安もあります。

僕が大切だと考えているのが、支援する際には専門家ずらなどしないで、支援を受ける人と一緒に考えて解決策を生み出そう、というアプローチです。これはよこはまチャイルドラインの原点にも繋がる

ことなのですが、私たちは“相談、助言”という言葉は一切使っていないで、“一緒に考えよう”というスタンスを常に大切にしています。僕がチャイルドラインに関わり始めたきっかけも、長年続けてこれたのも、これが原点としてあるからだと思うのです。支援する側の立場、などということとも違う、もちろん一緒に考えても何も良い考えが浮かばないこともある、それでも子どもの側に一緒にいることはできる、そう思っています。

## 40回の無言電話、その声なき声に寄り添えるかどうか

よこはまチャイルドラインでも、1人の子から1日に40回くらい無言電話がかかってくることもあります。この無言電話を大切にすることが第一歩だと思います。電話しても叱られない、またあなたでしょ、って言われたいという安心感。無言電話が40回続いて、41回目に話してくれる可能性はあります。その無言の時間も含めて、寄り添えるかどうか。私たちチャイルドラインも20年続けてきたなかで、子どもたちに鍛えられた面もあると思います。そういうなかなか繋がりを持たない子どもと、チャイルドラインという細い糸であっても繋がれるというのは、すごく大切なことですね。

## 子ども取り巻く変化、20年のあゆみ

子どもの置かれている状況でいうと、子どもの声を聞こうとする姿勢が社会的に増えてきたことは良い傾向だと思います。一方、子どもの気持ちや情報の整理をサポートする大人との関わりが減ってきたこと、これは残念なことですね。地域の大人たちとの交わりや、あるいは子ども同士の交わりも減ってきている。地域のお祭りの場などでも良いので、少しでも大人との関わりが増えるといいなと思います。

子どもたちが生きやすい暮らしとは、子どもと大人が一緒になって、明日明後日だけでなく、10年後、100年後の社会と一緒に考えることができること。子どもたちは柔軟な発想を持ってますから、まずはそれを受け止めて、できることは大人も一緒になって取り組んでいく。そんな環境が理想ですね。

副代表理事

## 松橋 秀之

Hideyuki Matsuhashi



Profile

1952年大阪生まれ。児童養護施設「のぞみの家」、横浜市の社会福祉職の職員を経て「日本水上学園」園長を務める。定年後は同園の理事長ほか、里親に関する活動など多岐にわたる。YCL 副代表理事

## 学校の先生になりたいという気持ちからの出発

私は大阪育ちなのですが、大学4年のときに大阪市の中央児童相談所で、社会福祉実習というものをしました。ケースワーカーの人に家庭訪問に連れていってもらったり、児童養護施設を訪れたり。そこで見聞きしたことは私にとってはショックなこともありましたが、同時にこういう仕事があるんだ、と思ったんですね。「学校の先生になりたい」という思いがあったんですけども、この経験を通して、児童相談所で働きたいと考えるようになりました。

大学を卒業して東京の児童養護施設で働き、その後横浜市の職員として、児童福祉司（ケースワーカー）を。そのときに松原先生（現・よこはまチャイルドライン代表理事）と出会いました。当時大学院生だった松原先生は現場のフィールドワークで来られたんですけど、一緒に家庭訪問や施設に行ったりしました。その頃から45年以上のお付き合いになります。最後は児童養護施設の園長として65歳の定年まで、その後は、里親のことや、日本水上学園の理事長など、そういう立場で子どもたちと関わっています。

## 親と暮らせない子どもたちとともに

私が児童養護施設で働き始めた当初は、親が病気になった、離婚してお父さんが育てられない、親が行方不明—そういう親が育てたくても育てられない状況にある子どもたちが多かったんです。施設で暮らすことを完全に納得してはいないけれど、そういった親の状況も子どもたちはわかっている施設で生活をしていました。

それに対して、いまは親から虐待を受け、施設で生活している子どもたちが多くなっています。親は元気なのに施設で暮らさなければならぬ…子どもたちの思いは複雑だと思います。

親が病気等の理由で施設で暮らしている子どもたちは、小さい頃に親の愛情を受けていることが多いように思います。「親が病気だから悲しいけれど、お母さんのために僕は我慢する」という思いだったり、「元気になったらまた家に戻れる」という希望も持っている。一方で、心理的虐待などで小さいときに親に愛されなかったり、疎んじられて育った子どもたちは、より複雑な思いを抱えて、施設で暮らしていると感じています。

施設で生活している何人かの子どもたちに「育てられないんだったら産むんじゃないよ」という言葉を投げられたことがあります。親に「あんたなんか産まなきゃよかった」というようなことを言われて、鬱積した気持ちが思春期に爆発したのだと思います。「産んだのはお前だろ、責任とれよ」という子どもたちの心の叫びを感じてしまいます。その言葉を親に面と向かって言えたらいいのだけれども、それは難しい。そういう親が発した言葉が子どもたちの成長の過程で精神的な負担になっていることを感じています。

## 福祉職員の著しい環境の変化

私が働き始めた当時（50年前）も身体的や性的な虐待の相談はありました。児童虐待防止法ができて、これに加えて心理的虐待やネグレクトの虐待が明確になったのです。虐待の相談件数が増える背景には、虐待という氷山に世間の目が向くことで、海面が下がってよく見えるようになった部分もあるし、氷山自体が大きくなっている部分もあるのかなと感じます。

児童相談所の相談の質も変わりました。私が45年前に児童相談所のケースワーカーをやっていたときには、1人で120人ぐらいの子どもを担当していました。でも残業もなく、土日や夜の出勤もなく過ごさせていました。今は担当する人数は半分以下になったようですが、子どもの命がかかっているようなことも多く、気が抜けない。虐待してしまった親との軋轢もあり児童相談所の職員には大きなストレスがかかっています。児童相談所や児童養護施設等の社

会的養護にたずさわる方々の心と体の健康を願わずにはおれません。

## チャイルドラインは「自立」の小さな一歩

児童福祉の現場でも、「子どもの自立の定義」が変わってきています。大学を出たから自立できているのか、というところではないじゃないですか。大事なのは「困ったときに人に相談できるような人間になっていく」こと。ひとりでしっかり生きていくのではなく、いろいろな人に相談し、助けてもらいながら生きていくことが自立のために大事だと思うのです。

その裏には、大人を信じることができる、今の自分でいいんだと思えることがあります。何か困ったときには人に相談したり頼っていいんだということ、いい大人と出会い、助けてもらい、大切にしてもらい経験を通して、人を信じる心を育むことなんですね。子ども食堂や学習支援などいい大人と子どもたちが出会う場であると思うのです。チャイルドラインもその一つです。電話をかけて、話を聞いてもらう、寄り添って一緒にいてもらうこと、親や友達以外の第三者に話を聞いてもらうという時間は、とても良い経験に繋がると思います。

そして、私たち受け手としても、本人が話したい時に話を聞けるということが、本当に貴重なタイミングだと感じています。親から「子どもが引きこもって心配なんです」と相談があったとき、子どもに信頼してもらって会ったり、話してもらうことになるまで大変なエネルギーを要した経験があります。チャイルドラインのように、本人（子ども）が誰かに話したい、と思ってかけてきたときに、話を聴き、気持ちをきちんと受け止めてあげること。外から働きかけるより、内からの声に耳を傾けることができれば、膨大なエネルギーもいらぬんです。

それがチャイルドラインの役割だと思っています。私たちは待っているだけなんですね。かけてきてくれるのを待って、そのまま話を聴いて、つらいとか悲しいとか苦しいとかいう、そういう気持ちに共感して。ただ、その「話を聴いてもらって共感してもらえる」ということが、子どもたちの明日に繋がる一歩になるのではないか、そう感じています。

## はい、チャイルドラインです。

### 「ピアヘルパーという役目」

よこはまチャイルドラインには「ピアヘルパー」という役目があります。「受け手」の中のお兄さん、お姉さんの存在で、主に電話を受けている時間に受け手が穏やかな気持ちで電話に向き合えるように和やかな雰囲気を作るのが大きな役目でもあります。受け手の様子を見て、重たい内容の電話を受けて気持ちが沈んでいる受け手に寄り添い、部屋を移動して話を聴いたりとその場に合った対応が要求されます。

実際には自分も電話を受けながらなのでそのまま

で気が回らない時も多々あるのですが、ピアヘルパーに任命された時から身が引き締まる思いが強くなりました。

今回、ピアヘルパーに新たな仲間を迎え9名での活動が始まりました。月1回のオンラインミーティングでは、困ったこと、嬉しかったことなどの体験を話し合ったり、時にはプライベートの相談をしたりと、なかなか全員が対面で会う機会が作れない状況のなかで楽しい時間になっています。

各自の個性を生かしながら、個々の思いを受け止め活動をしていきたいと思っています。

ピアヘルパー リーダー

## ご支援のお願い

よこはまチャイルドラインは、みなさまの寄付によって支えられているNPO法人です。活動を支援していただくサポーターを、広く募っています。

### ●賛助会員賛助会員になる

年会費（個人）3,000円／1口

年会費（法人）10,000円／1口

口座番号：00270-6-13812

口座名義：NPO法人 よこはまチャイルドライン  
※郵便振替（払込票をご利用ください）

### ●マンスリーサポーターになる

500円／月から寄付ができます。ホームページよりクレジットカードをご利用いただけます。

### ●1回のみ寄付をする

500円から寄付ができます。

ゆうちょ銀行当座

店名：〇二九店(029) 番号：13812

ホームページよりクレジットカードをご利用いただけます。

### ●「つながる募金」を利用する

ソフトバンクのつながる募金を利用して、毎月の携帯電話のお支払いとともに100円から寄付ができます。ソフトバンク以外の携帯をご利用の方でも寄付ができます。

## ご支援ありがとうございます

2023年6月～2024年1月までの  
寄付総額

129,169円



## 電話利用状況 2023年6月～12月

主訴	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
学校 フリースクール	57	58	41	40	40	64	35
部活	9	6	6	1	2	2	1
性	56	62	69	69	67	72	66
家庭	29	21	32	19	32	26	16
職場	3	1	0	0	0	1	0
ネット トラブル	2	1	2	1	1	1	0
地域	6	3	7	1	7	1	1
自分	89	88	95	81	81	76	67
不明	778	606	692	608	555	544	794
累計 (会話成立率)	1029 (24%)	846 (28%)	944 (27%)	820 (26%)	785 (29%)	787 (30%)	980 (18%)

### 【編集後記】

20年間にわたり発行を続けた、よこはまチャイルドラインの情報誌「With You」は、今回から「Harmony」という名前で、新しくスタートいたします。前任の方々の想いを引き継ぎ、令和の子どもたちのリアルな声をお届けできる場となりますよう「Harmony」を今後ともどうぞよろしくお願いいたします。(小山)